

2015 年上廣・カーネギー・オクスフォード会議

「気候変動－環境倫理、その実践」(2015 年 10 月 28 日～29 日) 会議概要

気候変化は倫理的問題だと言われているにもかかわらず、これまで倫理学(道徳哲学)からの取り組みは少なかった。会議初日、冒頭に Stephen Gardiner 教授(ワシントン大学)が「未来に対する集合的責任」と題して気候変動の倫理的責任について、個人の責任と集団的(国家的)責任の2つのレベルから、空間的・時間的の双方で集合的合理性と個人的合理性が対立する構造を指摘し、今求められている責任モデルの定式化(DMS)の困難さを示した。会場からの質疑により現在の責任転嫁と道徳の崩壊をもたらす危険、倫理的失敗についても強調され、歴史・経験的に、または戦略的な合意のもと世代間で継承されるべき集合的責任をめぐり会議の基調となる議論がなされた。

日本からの登壇者として最初に桑子敏雄教授(東京工業大学)から、東西の自然・哲学をふまえた自然と人間の関係、空間と身体の把握など環境哲学分野での個性的な研究手法が提示された。さらに地域の合意と対立の原型モデルとして日本の神話を用い、空間の履歴の把握による合意形成、地域に深く根ざす倫理的課題解決に繋げる実践例を示した。グローバルコンセンサスへの適応など議論が止まなかった。

Evan Berry 助教授(アメリカン大学)は、人々の消費習慣、経済政策、技術的能力が、人間や動物など生態系全体に予測不可能な有害な影響を及ぼすこと、個人やコミュニティ、あるいは国家や社会によって、世代間正義や道徳的責任、文化的な Harm(危害)に対する個別の観念が存在することから、気候変動は特定の方法で解決できる一つの問題ではないことが論じられた。

午前の最後は Guy Kahane, Deputy Director(オクスフォード大学)による「気候変動とノン・アイデンティティ(非同一性問題)」の発表で締めくくった。Derek Parfit が提唱した「ノン・アイデンティティ」気候変動では世代間倫理という問題が議論されるが、まだ生を受けていないものに対する倫理を考えることの難しさを NIP は指摘している。

という概念のもつ不確かさについて、またそれがどのように気候変動と影響関係にあるのか、最も質疑応答が活発化した。このように午前中は気候変動と倫理についての基調となる議論から次第に倫理的・道徳的哲学からの人間がとりうる責任・行動について回路を広げるものとなっていた。その後、午後のセッションから次第に空間(場)やテーマについてフォーカスされていった。

まず Peter Higgins 教授(エジンバラ大学)と高野孝子教授(早稲田大学)は本会議の課題の一つでもある教育の側面から倫理的課題解決への糸口を開いた。

Peter Higgins 教授はエネルギーや資源利用といった日常の行動から地球的な意味への理解を高めること(地球的関心)について、いかに“場”への関心を育てるか?が重要であること、その教育の役割、バランスを取り戻すためのコミュニケーションの役割について論じた。

続いて高野孝子教授(早稲田大学)はこれまでの環境教育が気候変動やサステナビリティなどの倫理を伴う問題への解決に至らなかった構造を明らかにした上で、人間と人間以外の自然界の關係に言及し、社会的・生態学的に持続可能な社会を築くための理解と行動を育てる「場に根ざした教育」について、日本の農村コミュニティ、ミクロネシアの島などの実際のプログラムを通じてその可能性を提示した。前半とは異なり、実践(この場合環境教育)に関わる質疑が活発にかわされた。

Dale Jamieson 教授（ニューヨーク大学）は、「責任」という概念を、「因果的責任（causal responsibility）」「道徳的責任（moral responsibility）」「法的責任（legal responsibility）」という側面から整理し、気候変動にかかわる問題は、これらの責任の解釈のみでは議論することが困難だとし、新しい「責任」の捉え方として「介入責任（intervention responsibility）」を提示し、積極的参画を促すことの重要性を主張したのに続いて、豊田光世准教授（新潟大学）は、具体的な事例に基づいて積極的参画につながる責任の捉え方について述べた。日本で連続的に発生した激甚型の気候変動による洪水被害の事例をもとに、そもそも災害・天災の概念やその違いがもたらす倫理的な側面について触れ、いかに責任の概念を理解するかが重要であることを指摘した。責任に対する異なる解釈をめぐる問題解決に向けた対話を導くための実践のあり方、（新潟県佐渡島トキの保護、共通の資源としての川をめぐる）合意形成のメカニズムについて実例を示した。

初日は Ingmar Persson 教授（ヨーテボリ大学）による「気候変動—最も困難な道徳的挑戦」で総括された。私たちは道徳的選択を行えるか？理解を高めるための地球的な強力関係を構築することができるのか、それを困難にしている道徳的心理学の現況について明らかにした。

2日目は Gustaf Arrhenius 教授（ストックホルム大学）が未来に影響を与える現代にとりうる道徳的な選択について、核廃棄物の事例を用いて問題定義し、人口倫理学的見地から規範的考慮や原理について、将来世代を考慮に入れるかたちで価値論的に検討を加えた。人口倫理学を支える適切性条件をすべて満たす理に適った理論は存在しないが、特定のメタ倫理学的議論の可能性をも示唆するという意味では、異なる未来への道徳的評価を検討する意義について質疑応答で展開された。

その後吉川成美（早稲田大学）は気候変動への適応策として過去から現代へ継承されている有機農業運動の「提携」による農業倫理とその教育的価値について発表した。市場原理に頼らない農家と消費者の倫理的互助関係は40年前に日本で着手され、現在ではむしろ欧米・カナダ・オーストラリア・アジアなどで家族農業を守る適応戦略となっている点で未来は選択できるとした。

最後に Julian Savulescu 教授（オクスフォード大学）は「他者の目」が個人の行為に及ぼす影響の大きさについて心理学的研究をもとに示した後、いわゆる「恥」にもとづく倫理が気候変動の環境倫理においてどのような意味をもちうるかを論じた。それが世代間の責任や倫理的腐敗、グローバルジャスティスなどのこれまでの議論を乗り越えるものである。

2日目の午後は Paul Galloway（リバーキーパー代表）を招き、ハドソン川の保全、飲料水としてニューヨーク市民へ供給するに至るプロセスとその成果をお話いただいた。1987年に始まった環境運動を契機にニューヨークを拠点にハドソン川のみならず土地の保全に従事、2010年にリバーキーパーの代表に就任、現在はクラークソン大学ビーコン研究所で教育に携わっている。全参加者からはこの実践者への賛同と関心が高まった。

2日間の会議は、倫理的・道徳的哲学からの人間がとりうる責任・行動について理念から場へ、実践例から未来への選択・適応策を模索するものとなった。最後に Julian Savulescu 氏が、「気候変動の解決には経済的な数値や、生態レベルを示す観測数値だけに寄らず、倫理的アプローチの顕示が必要である」という総括がなされた。今回は、日本からの研究者は実践的な側面から「人を動かす倫理」に力点を置き、欧米の研究者は倫理学的な理論・概念ベースの議論に力点が置かれていた。東西の哲学、倫理的な適応策が示された結果となり、凝縮された意義深い会議となった。

文責：早稲田大学環境学研究所研究員 吉川成美先生